

”彼女があなたのことを好きになったようです。”

20歳の当時、私は「ボランティア」という言葉に抵抗を感じていた。左目の視力が0.1以下の私は申請すれば軽度の障害者だったが、母親が「差別」を嫌い申請せず、いわゆる「健常者」で通した。静岡大学の法学生だった私には、知り合った脳性麻痺の友達が2人いた。軽い言語障害があるY君と、車いすの重度のM君だった。そのM君がスキーをやりたいと言えば、久しぶりに俺もやりたいから、一緒に長野まで行く。居酒屋に行きたいと言えば、勿論酒好きの私故に、喜んで一緒に行く。友達として介助するだけで、私には「ボランティア」の意識はない。

「身体障害者の教育と労働」が研究テーマだった私は、「教育で個々の能力引き出し、その能力を生かせば労働に繋がる」との考えを実践するために、Y君の紹介で3人の出資者を得て、そのM君と共に有限会社の設立に参加した。それが現在の事業の起源である。

そんな折7月下旬、M君の紹介で長野県の脳性麻痺者団体の本多節子さんから、8月の中旬に長野県蓼科で行われる同団体の2泊3日のキャンプのお手伝いの依頼が来た。そのメンバーと事前に知り合いたいからと宿を取りキャンプの3日前に長野入りした。メンバーと顔合わせをしキャンプの打ち合わせをした後、そのメンバーと体験をしたいというパチンコに行ったり、カラオケを共にしたりした。また、私が重度の脳性麻痺者と会社を興したと知って、メンバーから障害者の置かれている状況を聞かされ、彼らと様々議論した。私も本当に楽しかったし、身体障害者の教育と労働について色々な意見を聞かされ、有意義だった。

キャンプの前日は本多さんからの申し出で宿をキャンセルし、本多さんの家に泊めて頂くことになり、メンバーと松川町の本多さんの家で最後の打ち合わせをし、夕食を共にした。その時、本多さんから「Sさんがあなたのことを好きになったようです。」と打ち明けられた。Sさんはそのメンバーの一人で私の2歳上、純粋な人で、M君と同様重度の脳性麻痺者であった。本多さんは、「彼女も真剣です。もちろん、それを受け入れるか否かは、あなたが決めること。その結論は、私が彼女に伝えます。」と言ってくれた。私は驚いたと共に、所謂ボランティアとしての接し方か、人としての接し方か、この数日の自分の言動を振り返り、考え反省した。実は当時私には付き合っている彼女がいたので、正直にそのことを伝え、その気持ちを受け入れられない旨を伝えた。

そして翌朝、泊めて頂いた部屋で目覚めてびっくり。本棚には「本多勝一」の本がびっしり並べられており、机の上には書きかけの朝日新聞の原稿が万年室と共に置かれていた。急いで階下の食堂に行き、本多さんに本多勝一氏との関係を聞くと、「私の兄です。」と言われた。「実は兄もあなたに会いたかったようですが、昨日朝、朝日新聞社から電話があり、緊急の編集会議で東京に行き、宜しく伝えて、とのことでした。」

当時「本多勝一」と言えば、「戦場の村から」という朝日新聞の連載でベトナム戦争の実態をルポし、ベトナム戦争を痛烈に批判した新聞記者で、当時法学生にとっては憧れの人だ

った。そんな人の部屋で私は寝たんです。